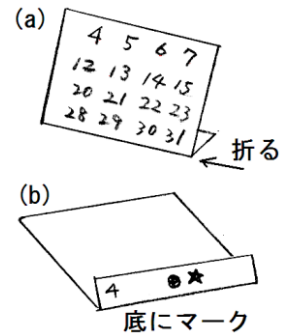


嘘つきの当てものカード (1~31) の作り方・演じ方

◆作り方

- ・9枚のカードに切りはなしします。カードの下部を折り曲げてテーブルの上に立てられるようにします (a)。
- ・カードの下部には、◆●★■のマークがあります(b)。1,2,4,8,16 の数字が見えるカードが5枚あります。マークがひとつしかない4枚のカードには数字はありません。カードを立てたときには見えません。



★初級マジックの演じ方 (底に数字のあるカード5枚を使用します)

- ・相手に1~31の数からひとつを選んでもらい、その数を秘密にして黙っててもらいます。
- ・演者は相手にカードを1枚ずつ見せ (順序は任意)、秘密の数が「あるか・ないか」を問います。
- ・「ある」と聞いたカードをテーブルに伏せていきます。相手には見えない数字があなたには見えます。見えた数の和を暗算で求めます。相手が選んだ数はその和になります。

(例) 相手が14を選んだとします。5枚のカードのうち、2,4,8のカードに「ある」と答えます。その和は14です。

★上級マジックの演じ方 (9枚のカードすべてを使用します)

- ・相手に1~31の数からひとつを選んでもらい、その数を秘密にして黙っててもらいます。
- ・演者は相手に次のように告げます。「これからお見せするカードには16個の数があります。あなたが思った数が「あるか・ないか」を問いますが、正直に答えてもよろしいです。ただし1枚のカードに限り、数があるのに「ない」と答えても、数がないのに「ある」と答えてもよいとします。嘘をつくのは1回限りです。」
- ・カードを1枚ずつ見せ (順序は任意)、秘密の数が「あるか・ないか」を問います。
- ・「ある」と聞いたカードをテーブルに伏せます。相手には見えないマークや数字があなたには見えます。
- ・9回の質問が終わったとき、「ある」と聞いたマークの数に注目します。

- ・相手が正直に答えたとき：同じマークの数はすべて偶数 (0か2か4) です。カードに見える数の和が選んだ数になります。底に数のないカードは無視します。

(例) 相手が14を選んだとします。5枚のカードで「ある」と答えますが、4種のマークは2個ずつありますから、正直に答えたことが分かります。数の見えるカードの和は14です。

- ・数がないのに「ある」と嘘を答えたとき：1枚のカードが過剰です。マークの数は偶数ではありません。どれか1枚のカードを除くとマークの数が偶数になります。除くカードで相手が嘘を言ったのです。残ったカードの見える数の和が相手が選んだ数になります。

- ・数があるのに「ない」と嘘を答えたとき：1枚のカードが不足です。マークの数は偶数ではありません。どれか1枚のカードを加えるとマークの数が偶数になります。加えるカードで相手が嘘を言ったのです。相手が選んだ数は揃ったカードの見える数の和になります。

	2	2	2	2	
正直					■
	◆				
	8			★	■
	4		●	★	
	2	◆	●		
	3	2	2	3	
過剰	1	◆			■
					■
		◆			
	8			★	■
	4		●	★	
	2	◆	●		
	2	2	2	2	
	4		●	★	
不足	2	1	1	2	
					■
		◆			
	8			★	■
	2	◆	●		

■原案作成者：誤り訂正符号を利用した1~15の数当てカードの原案は、東京理科大学の山口康之氏によります。これは山口氏の原案を秋山が1~31に拡張し、マークを見えない位置に隠したものです。